Well-being 哲学研究の現在地点

伊集院 利明

1　序

本稿の表題にはやや大げさな響きがある。哲学における well-being（以下 WB）研究はかなり大きな分野であり、現在の研究の動向の全体を短い論文でもって総括することは容易ではない。ここに示すのは、現在の研究の全体像というよりは、その中のとりわけ顕著で重要と思える局面を切り取ったものと言ったほうが適切である。当然のことながら、現在の動向の内のどの点に重要性があるかということ自体が論争の対象となる。そして、その重要性の見積もりは、それぞれの論者が、WB 研究がこれからどのように展開されていくべきと考えているのかの観点により大きく左右されてしまうのではないかということが考えられる。本稿は、よく言えば、その点について自覚的に話を進める。ここに提示するものは、現在の研究動向のうち、WB 研究の今後のあるべき方向性についての私自身の観点からして重要と見える局面であると言っても言い過ぎにはならない。ただし、一方で、私は、自身の研究方法を、次のようなものとして自覚している。それは、意識的に、なるべく広範に、学界で提示されてきている多様な視点の含む有益な着眼点を生かし、それを総合化する形で新たな説を構築していくという指針である。その意味では、私の学説誌のとらえ方は、私自身が了解している限りでは、現在までの研究状況の全体にできるだけ公平に目を配るということに定位し、そこから、自説の像の構築のための材料を得ながら、自説構築のための視点と、現在段階までの諸説との間の反照的な吟味考察を展開することで、説を彫琢していくという方針から組み立てられていくものであり、その意味では、本稿に提示するものは、極端な偏りを避ける指針の下に提示されることになると思われる。

WB 哲学研究がかなり広大なものであると述べた。これは、やや誇張があるかもしれない。現段階において、哲学の WB 研究はかなり盛んな分野になっている。しかし、この分野の哲学研究が学界単位のものとして本格化したのは、比較的最近のことである。1980 年代に Parfit がこの分野の三大説（快楽説、欲求充足説、客観的リスト説）を整理した（Parifit 1984）際には、その整理自体が先駆的なものと受け止められたし、諸説間の相互議論吟味もまだかなり未発達の状態であった。それでも、現在では、この分野では生産される文献数がかなり加速度的に増大しつつあり、また、言うまでもなく、功利主義等の枠をはるかに超えた形で議論がなされている。

以下、第２節では、近年の研究動向のうちのいくつかの目につく点を整理する。そのうえで、それらから浮かび上がってくる、今後の研究に向けての方向性を第３節において考察する。

なお、シンポジウムの主旨からすれば、本稿は、初学者にもわかりやすい説明を加えるかたちで論述するということが当然考えられる。しかし、字数の制限など考慮すると、どうし

ても専門家を主に対象とするような書き方にせざるを得ない。幸いこの分野では、優れたIntroductionが現れている（Fletcher 2016）ので、この分野についての知識が不十分な方はそれをご参照いただきたい[(1)]。また、英語が苦手な方には、研究状況を知るための基礎知識を日本語で提供してくれる有益な本が出ている（森村 2018[(2)]）ので、それを参照していただければ幸いである。

２　近年の諸動向

現在時点と言っても、直近のあまりに短い時期の動向に絞ってしまうと整理が困難となる。だいたい、この10年ほど、あるいはもう少し長めの期間の動向を整理する。

５点に焦点を絞って整理を進めたい。

２－１　　三大説図式は、変容しつつも健在である

Parfit 1984の古典的分類による三大説の整理（快楽説、欲求充足説、客観的リスト説）に対しては、懐疑の目が向けられて来ていないわけではないものの、今日では、それを多少変容させた形で、次のような形でビッグスリーを整理するのが最も合理的に思われる。（そして、必ずしも多くの学者により明確に表明されていなくとも、実質的にはそのような形の扱いを受けていると言い切っても差しさわりがないように思える。）

快楽説[(3)]
主観説　　（欲求充足説、life satisfaction説、value theoryなど）
客観説　　（客観的リスト説、perfectionism・eudaimonism）

主観説、客観説のそれぞれの代表は依然として欲求充足説、客観的リスト説であるので、その意味では、この図式は、古典的三大説図式をわずかだけ拡張したものにすぎない。（なお、上の図式表記には、すでにお気づきの方も多いと思うが、少し不正確なところがあるが、それについては、もう少し後で整理する。）

主観説は、本人の肯定的態度の是認の如何を基準とするものであるが、肯定的態度として何が当てはまるのかについて、第一の候補が欲求であることには今日でも変わりがないものの、特に欲求だけを取り上げることに現段階では説得力がなくなっている。欲求のほかに、判断、valuing[(4)]などが有力な候補になり得るのであり、また実際にそれらを当てはめる主観説が有力なものとして提案されている(e.g. Dorsey 2012, Tiberius 2018) 現状では、上のような形で、主観説としてまとめるのが適している。

主観説が主観説として整理されるのは、いま述べたように、本人の肯定的態度の是認如何が基準となるということによる（だから、快楽が本人の主観的状態であっても、それだけで

はまだ快楽説が主観説になるということにはならないものとして扱うのが、今日では標準的である）のだが、実は主観説のうちのかなりのものは、ある意味ではかなり客観的な説である。欲求充足説のうちの最も典型的なバージョンでは、WB 実現の要件となるのは、私がなにかを欲求していて、かつそれが実現されているということである（I desire that p かつ p ）。ここで、それが実現されているかどうかということは、（この典型的バージョンでは）客観的に判定される。（こうした形で、世界と私との間の客観的関係性が問題になるということが、快楽説が経験機械の議論に対して弱みを持つことに対比される利点となる）。こうしたバージョンは、今日では、客観的欲求充足説と呼ばれ、主観的欲求充足説、つまり、欲求された事態が主観的に実現されているかを問題とするバージョン（e.g. Heathwood 2016）と対比されるが、それでも、先に述べた理由により、客観的欲求充足説も主観的欲求充足説も、どちらも、主観説として整理される。

これをより一般化して言うならば、主観説には、客観的主観説と主観的主観説のバージョンがあるという（かなり珍妙な）言い方をすることができるということにもなる。上の三区分で主観説に分類されるものと客観説に分類されるものとの相違の重要性から考えるならば、上のような形で、客観説と主観説を区分することの合理性は極めて高いのだが、その一方で、主観説のいくつかのバージョンの有する客観性への着目の重要性に目を止めることも忘れてはならないであろう。

さて、先にも簡単に述べたことだが、この三区分が表記上の正確性を欠いていることは明らかであろう。この区分では、快楽説が主観説でも客観説でもないものとなってしまう。だから、正確には、表は

快楽説
主観説（ただし快楽説が主観説である場合は、主観説のうちの快楽説をのぞくもの）
客観説（ただし快楽説が客観説である場合は、客観説のうちの快楽説をのぞくもの）

とでも、表記されるべきである。

先にも述べたように、快楽が当人の主観的状態であっても、それだけでは快楽説が主観説であるということにはならない。今日の標準的見解（あるいは「比較的標準的と言える見解」と記したほうがよいかもしれないが）では、快楽説が主観説であるか、客観説であるかは、未決定であり、それは、快楽説論者が快楽をどのようなものとしてとらえるかによって決まることになる。快楽についての説は、哲学では、快楽が本人の肯定的態度により成り立つとする態度説と、それに対立する感覚質説に分かれる（数的には、態度説が優勢と言えると思われる）。現在のところ、快楽説は、快楽説論者が快楽を態度説で考えるならば主観説となり、感覚質で考えるならば、客観説となるという理解（e.g. Heathwood 2014）が多数派であり、ほぼ、それが標準解釈と言ってよいと思われる（ただし Fletcher 2013 などの反論があり、この点では私も Fletcher に同調的である）。――この問題を取り上げるのは、単に分

類整理の問題を精密化するための都合ではない。というのも、快楽がどのようなものかということは、快楽説をとらない場合でも、WB を考えるうえでかなり重要な考察課題になるはずであろうからである。このこと（考察課題として重要であること）は、実は、欲求充足説の場合の欲求についても当てはまるように思われる。快楽、欲求についての哲学的考察は、哲学の諸分野の中で、どちらかというと発展の遅れた分野と言えるかもしれない。それ以上に、WB 研究と、快楽や欲求についての研究（元来、心の哲学に分類されるもの[5]）との連携がまだ十分な状況とは言えないかもしれない。これは、WB 研究の今後の課題としても重要な一局面と言えるように思える。

なお、上に整理したビッグスリーはあくまでもビッグスリーであって、網羅的体系的な区分というわけではない。ただ、網羅性について言うと、hybrid 説が入らないことになるが、それでも、それ以外のほとんどの提起されている説が含まれることになる。また上に述べたような、快楽説の区分上の扱いの問題等の点で体系性に欠けるところがある（cf. Woodard. 2013）が、しかし、この、ビッグスリー図式は、有用性が高く、先にも述べたように実質的には、ほとんどの論者がこの図式を念頭に論を展開していると言っていいように見受けられる。それは、古典的な Parfit のビッグスリー図式の恣意性が問題にされるときに、しばしば、体系性への視座として重視される enumerative／explanatory の軸(Crisp 2006, 2013)と主観的／客観的の軸の両者について、前者の有用性に疑念がふせられることと、後者について先に述べたような事情があることである。前者については、ここでは文献指示（Lin 2017b）にとどめて説明を省略させていただく。後者についてもう一度まとめると、上のビッグスリー図式の主観説／客観説の分類は、確かに有用性が高いこと、そしてその一方で、多くの主観説に含まれる客観性への着目の重要性（言うまでもなく、ここでとりあえず言いたいことは、そうした客観性をどこまで重視するかということの問題性が重要であるということにすぎない）を、踏まえねばならないこと、こうした二つの点の、関係に注意を払うべきであるが、逆に言えば、その点さえふまえれば、それ以上、いまの段階で、諸説の体系的整理の仕方について云々することにそれほど生産性があるという保証がないとみなされる。

ビッグスリーの三説のそれぞれの強み、弱みについては、研究者の間で、一定の了解の一致があるが、それ以上に、それぞれの説の弱みの内で、どの点が特に重要であるのかという点についての了解の一致もかなりあると言える。それぞれの説の弱点については、２－２，２－４で取り上げることとする。

２－２　主観説と客観説の（それぞれの利点の）融合化の試み

この方向性の試みが、きわめて活発である、顕著であるというわけではない。しかし、一定程度そうした方向性のもので、重要性のある研究が出ている(e.g. Fletcher 2013, Yelle

2014,Tiberius 2018)ことも確かである。

そうした方向性のものが現れることは、ある意味ではきわめて自然なことと言える。主観説、客観説のそれぞれの最大の弱みであると今日了解されているところのものは、それぞれが、同時に、対立する説の強みとなる。

主観説、客観説のそれぞれについてはさまざまな問題の存在が提起されてきたが、それぞれの最大の問題が何であるのかについては、今日においてかなり了解が一致していると言ってよいと思われる。主観説の最大の問題は本人の是認さえあればよいのであるとすると、是認されるものが、明らかに、ほとんどの人の目から見て本人の利益に反していると思われるようなもの、本人の善に何らつながらないと思われるようなものでも認可されることになるが、これがかなり反直観的に映るということである。ここで特に問題なのが、誤情報に基づく選好の問題（もあるがそれ）以上に、正確な情報に基づきかつ本人の心からの選好の場合であったとしても、あまりにもばかげた選好というものがおこることが考えられるであろうということである。こうした問題は、deprivation 問題と名付けられることがある(e.g. Yelle 2014)が、それは、主観説では、明らかにほとんどの人々の目から見て善であると思われるようなものが本人から奪われてしまう（可能性がある）ことになるということから名付けられたものである。他方で、客観説の最大の問題であると受け止められているのが、alienation 問題と呼ばれているものである。客観説がなにかを善であると言い張るとしても、それが本人が魅力を感じないもの、関心を持たないものであるならば、客観説が描く WB は本人から疎外されたものとなってしまうのではないかという問題である。この問題を定式化した次のパッセージは、WB の文献ではいやというほど引用されるものである。

（前略）－－－－ it does seem to me to capture an important feature of concept of intrinsic value to say that what is intrinsically valuable for a person must have a connection with what he would find in some way compelling or attractive. It would be an intolerably alienated conception of someone’s good to imagine that it might fail in any way to engage him. (Railton 1986 47)

この問題は、公平に言ってきわめて大きなものと言わざるを得ないであろう。WB 研究では、現段階において（も）主観説派と客観説派とでは、主観説側の方が数的にははっきりと優位であるが、その理由も、この問題の説得力の重みにあると言って間違いがないであろう。

同時に、双方のそれぞれの欠点が、相手方の強みとなっていることも明瞭である。客観説は deprivation 問題に対する強みを持つ、という以上に、まさに、それを発生させないことこそが、客観説のそもそもの眼目と言ってよいし、主観説と alienation 問題の関係についてもまさにそれと同様の関係が成り立つ。

こうである以上、両者の利点をうまく取り入れ融合化する説を志向することは、至極自然

の成り行きであると映る。そうした方向性は、それなりに出てきている。ある意味では、それなりに出てきているものの、それ以上ではないということの方が不思議とも思える。もっとも、それには、事情もある。というのも、下手に利点を組み合わせようとすると、むしろ、双方の利点を取り入れる以上に、双方の弱点の方を引き受けてしまう可能性がある。実際にhybrid 説のいくつかの試みに対してこのようなことが指摘されている。客観的条件、主観的条件のどちらをも必要とするという形で（あるいはどちらをも重要な要件とするという形で）掛け算方式で考えると、どうしてもそのようなことになりがちであることが指摘されている(cf. Fletcher 2016)。そして、好ましい答えに合わせて計算式を組み替えようとするならば、文字通りアドホックな調整になりかねず、理論の体をなさないものになりかねない。(ひとこと、用語上の注意書きを加えておく。WB 研究では、リスト説的な説で、リスト項目を客観的なものと主観的なものとの混成とする説、例えば、欲求充足と、達成の総量が、WB の総量となるとするような説は、客観的リスト説の一種として扱われる。足し算的な説は、標準的分類では客観説として扱われる[(6)]のであり、この分野で hybrid 説と呼ばれるのはあくまでも、掛け算的な説である。)

ここでは、利点総合化を指向する説として代表的と言える二つのものを紹介しておく。

一つが客観的リスト説の枠内での融合化の試みである Fletcher の説である。今日の客観的リスト説論の代表的論者の一人 Fletcher は alienation 問題を避けるためにリスト項目を attitude-dependence 要求と両立することをはかる(Fletcher 2013)。Fletcher はリスト項目を、達成、友愛、happiness、快楽、self-respect、徳に限定し、それらがいずれも、その構成要因として肯定的態度を含むとする。これは、確かに、主観説、客観説のそれぞれの利点の接合の一つの試みと言えよう。――ただし、この論にはそのままでは欠陥があるように思われる。必要なのは、項目の構成要因のそれぞれが肯定的態度を含むことではなくて、構成要因に対して肯定的態度があることであるように思われるからである。これについては、第３節で取り上げなおすこととする。

もう一つ、主観説側のものとして、Tiberius 2018 の value fulfillment theory を取り上げておきたい。これは本人の価値がどの程度実現されているかにより WB が決まるとする説で、主観説のうち、主観的肯定的態度に、欲求や判断でなく、valuing をあてるものである。(Sumner 1996 の authentic happiness 説に刺激を受け、人間にとっての valuing の重要性を考慮に入れて改訂した説とのことである。Sumner の説に近いところがあるものの、より客観説との融合に近づけたものと言ってよかろう。) valuing とは、情動、判断、欲求等の総合により成り立つものだが、Tiberius によるとそれはその人にとって適切なもの、つまり、その人の心理的、素質的あり方に適合するものでなければならない、そして、一定の安定性が保ててこそ、個人の価値として成り立つとされる。こうした条件を課すことにより、人々の value(するもの)は批判的評価の対象となるものとなり、その意味でこれは、主観説の枠内で、客観説の強みに対して一定の連携を持たせる試みとみることができる。（Tibeius が融合性を志向していることは、Tiberius 自身が自身の論を、WB 心理学の

hedonic 系のもの（Diener 系(SWB)、Kahneman 系）と eudaimonia 系（Ryff や、ポジティヴ心理学）の知見を統合する性格のものとしているものであることからしても、自然なことと言えよう[7]。）――この Tiberius の論にも一定の改訂が必要と思えるが、それについては、第３節にまわす。

２－３　実証研究との連携

哲学全体において、実証研究を参照にすることは、今日ではかなり盛んになされている。この分野における実証研究との連携は、ある意味では進んでいるが、ある意味では遅れている。ある意味では進んでいるというのは、例えば、近隣の meaning in life(以下 MIL)研究の分野などに比べれば、一定程度の進展があるということだが、それでも、例えば、心の哲学の分野などに比べればかなり遅れており、総合的に言えば、この分野における実証研究との連携はまだ緒に就いたばかりの段階と言える。それでも、近年、連携を図る、いくつかの注目すべき研究が出つつある（e.g.Tiberius 2018, Besseer-Jones 2014, 2021, Alexandrova 2017, Bishop 2015)。このうち、Besser-Jones 2014 は、主に自己決定理論（SDT）の成果をフル活用したもの、また Tiberius のものは、（先述のように）WB にかかわる心理学のうちのいわゆる hedonic 系のもの(心理学ではこのように呼ばれるが哲学では、hapiness 系と呼ばれることが少なくない）と eudaimonia 系のものとの架橋をにらんだものであり、また、Alexandrova のものは、かなり幅広いかたちで実証研究と哲学との関係を論じている。

実証研究の諸説と、哲学諸説との対応関係としては、次のような図式的理解[8]がほぼ、定着しつつある。安定した理解の形成は、進捗の一つの表れと言えよう。

哲学説	実証研究	実証研究の諸説、諸理論
快楽説	心理学	objective happiness(Kahneman)
主観説		SWB　subjective well-being(Diener)
客観説		Ryff の six-factor model of psychological well-being SDT（Ryan Deci） ポジティヴ心理学（Seligman など）
欲求充足説	経済学	欲求充足（in welfare economics）
客観的リスト説		capabilities approach in development economics

いくつかのことを追記しておきたい。

まず、すぐ上で Tiberius の論が心理学の hedonic 系(Kahneman 系、Diener 系)と eudaimonia

系（Ryff, SDT（自己決定理論）、ポジティヴ心理学）との間の架橋をにらんでのものであると述べたが、心理学のこの二つの間の流派の関係あるいは拮抗性への着目は重要であろう。限られた系統の研究だけに依拠することは危険であろう。また、そもそも、この二つの系統の研究は、一定の面においては、それなりにかなり似た方向性の成果を出しており、このことは、SWB 研究者（つまり Diener 系）の論者にも指摘されている（e.g. Kashdan, Biswa-Diener, King 2008, また彼らはこれを eudaimonia 系論者に対する批判の一つの拠り所ともしている）。この問題は、哲学における主観説と客観説との関係、あるいは、快楽説と、世界との関係性を重視する説（客観説と「客観的主観説」）との関係を考えるうえでも重要になろう。

なお、哲学側からの連携のほかにも実証研究側からのものも期待したいところであるが、実際にはそれは、限られた局面のものとなっているように見受けられる[9]。

もう一つ、先に MIL 哲学の分野に比べれば WB 哲学の方が連携は進んでいると述べたが、そのことについてである。哲学の中をとっても、MIL 研究と WB 研究の間の連携は十分とは言えない[10]。そしてこのことは、心理学との関係をも巻き込んだ問題となると思われる。というのも、哲学研究における両分野の間の連関づけは、両分野についての心理学研究との連携とも連動してくる可能性があるであろうからである。同時に、心理学研究内部においてこの二つの分野の関係の考察が、はた目から見る限りでは十分には進展していないようにも見えるだけに、その展開も期待したいところである。

２－４　快楽説の復興

快楽説の復興と言っても、完全に復権したというような状況ではない。快楽説と言えば Crisp と Feldman だというような時代とは違い現在では快楽説の支持者はかなり増えているものの、依然として、かなり多くの論者の間では、この説の最大の論敵である経験機械の論により、快楽説は信頼を失ったとする思いがほとんど揺らいでいない。

しかし、近年の実験哲学的ないくつかの考察（de Brigard 2010, Weijers 2014 など）により（経験機械的思考実験で設定をいろいろと変更すると、それなりに多くの人が経験機械の中の方の生を選択する）経験機械の議論は、以前ほどは決定的なものとして扱えなくなっているとみなすのが妥当であろう。

ただし、この点に関する限り、「以前ほどは」というにすぎないと考えるべきなのではないかと思われる。というのも、Lin2016 の言うように、まったく同じ mental state の二人の人間を比べた場合に、経験機械の中の人と外の人の二人の人間の WB 値が同じとは思いにくいということは、やはり、快楽説にとって、かなりのマイナス材料になると思われるからである。公平に言えば、（Lin 2016 の言うように）経験機械の議論は、以前のように決定打になるものではないが、依然として快楽説にとってはそれなりに大きなマイナス要因になっているというところが、妥当なまとめと思える。

しかし、快楽説を支持する他の道もある。経験要請（experiment requirement）と呼ばれるものに訴える道である。本人が経験できない要因は、本人の WB に影響を与えないのではなかろうか。

これは、経験機械の議論に対して、単にそれを頭ごなしに否定するだけのものに見えるかもしれない。しかし、快楽説は、例えば、WB にあずかり得る主体の範囲に訴えることができる(e.g. Deijl 2021)。直観的に言って、WB にあずかり得るのは、意識を有するものだけであろう。さらに言えば、意識を有するものの中で、快などの肯定感をもつものだけなのではなかろうか（cf. Lee 2019)。であるとすると、欲求充足説や、客観リスト説などが正しいとすると、こうした快感等を有しない生物にも、WB の実現が可能ということになってしまわないであろうか。（これについて議論はあるものの、容易に解決できる問題とも思えない。）

この問題と連動するもう一つの問題が、WB の概念規定自体の問題である。WB は私にとってよい状態であると規定される。しかし、その意味は必ずしも明瞭とは言えない。私が何もよく感じないような要因は、私にとってよいことであると言えるのであろうか。「にとってよい（good for)」の意味からこれを探っていく道は、必ずしも生産的とは言えないかもしれない（これについては、例えば、Fletcher 2021 を参照)。

この点で着目すべきなのは、おそらくは、やや古い時代の文献であるが Kagan の論（Kagan 1994）であろう。Kagan は、私自身にとってよいかという問題と、私の生がうまくいっているかという問題とを分けることを提唱する。ビジネスマンが妻や同僚に騙されているかどうかという問題は、後者の問題であり、前者の問題は、ビジネスマンの心の状態の問題に限定される、なぜならば私というものが、私の心と体により成り立つ以上、私がよくなるということは、私の心もしくは体が何らかの変化を起こすことなしには不可能であろうという論である。

これに対して、同じ心的状態であるならば、現実の世界にいるほう（あるいは騙されていないビジネスマン）が経験機械の中にいるほう（あるいは騙されているビジネスマン）より WB があるに、ないしは、本人にとってよいに、決まっているではないかという直観に訴えることできると思われるかもしれない。実際に多くの学者はその直観を支持する。しかし、その直観を認めない学者の目からするとどうなのかということは、真剣に考えねばならないかもしれない。別の言葉で言うと、この点に関する直観の食い違いを最終的分裂地点として扱わずに、何らかの対話をすすめる道を模索する必要があるのではなかろうか。そしてそれを考えるうえでも、実は、WB というもの自体が一枚岩ではないのではないかもしれないという可能性（私自身は、必ずしも WB が明確に二つのものに分かれるという考え方を支持できないが）の如何を真剣に議題とする必要に迫られているのかもしれない。

なお、WB の概念の不安定性をめぐっては、別の角度から Scanlon 1998 のきわめて重要な論があり、その論が WB 研究界において必ずしも十分に着目されていないことは、かなり残念なことであるように私には思われるのだが、それについては、今回は論究を省略する[(11)]。

２－５　欲求充足説の一つの方向性

この項目は、これまでの四項目ほど重要性があるものとは私には思えないが、それなりに目立ってきている傾向性であるので、ごく簡単に整理しておきたい。

欲求充足説では、例えば、誤った情報に基づいて欲求したものの扱いが問題となり、一つの方向性として、仮に十分な情報が得られたとした場合にどのような欲求が形成されるかで考える、という方向がある。しかし、この方向性は近年では欲求充足説サイドの間ではあまり魅力あるものとは受け取られないことが多いようである。というのもこれは、主体を理想的な状態に置く路線であるのだが、それは、別の言い方で言うならば、理想的欲求者を立てるという路線となるのであり、仮に理想化を情報の完全性等に強く限定するとしても理想化にはかわらず、理想化された人間は現実の本人とは違う人間である以上、欲求充足説の元来の主旨である、本人自身の是認の如何を重視するという強みが失われてしまうととらえられているからであると理解される。代わりに注目を集めているのが、欲求充足量総合化路線とでもいうべきものである。つまり、自分にとって不利になると傍からは見えるような欲求等を満たすことは、その（満たす）分だけたしかに（欲求充足である以上）プラスではあるのだが、他の欲求が充足できなくなるので総合的にはマイナスになるとする路線である（こうした方向性を持ったものとして、e.g. Lemaire 2016, Dorsey 2012)。

３　展望

本報告の表題からすれば、本来の主旨は、前節までの内容となる。しかし、前節にまとめたいくつかの方向性を全体的に俯瞰して見ると、それらがやや雑然としたものと映るかもしれないにもかかわらず、そこから今後の研究の取るべき道の示唆がそれなりに浮かんでくるように思える。もちろんここに示すのは、私自身の方向性という以上のものではない。３－１でまず、２－２で扱った総合化路線について若干の検討を加えてから、３ - ２で、そこから浮かび上がる方向性として、WB 研究と MIL 研究の連携の可能性が考えられるということを取り上げていきたい。

３－１　融合路線の検討

主観説と客観説との利点を融合化しようとする試みとして２ - ２で取り上げた、二つの論、Fletcher のものと Tiberius のものについて、若干の検討を加えておきたい。というのも、この二つの論はどちらにしても、一定の改訂を必要とするように思われ、そしてそのあるべき改訂の方向性が、WB 研究と MIL 研究の連動の構築の必要性を示唆しているように思えるからである。

まず客観的リスト説の枠内での融合化の試みである Fletcher の論から。

先に述べたようにリスト項目を、達成、友愛、happiness、快楽、self-respect、徳に限定し、それらがいずれも、その構成要因として肯定的態度を含むとする Fletcher 2013 の論には重大な欠陥があるように思われる。必要なのは、項目の構成要因のそれぞれが肯定的態度を含むことではなくて、構成要因に対して肯定的態度が向けられることであるように思われるからである。少なくとも、達成、友愛に関してはこのままではうまくいっておらず、何等かの改訂が必要に思われる[(12)]。しかし、その一方で、この問題については、比較的自然な形で改訂の提案が浮かび上がってくるように思われる。二つの（次元の）肯定的態度の間の連動性を想定することができるように思われるからである。例えば、達成（なにかを成し遂げること）をとりあげて言うと、達成されるところのものに対する肯定的態度は、自分がそれを達成することを自分の生にとって重要なこととして受け止めることと連動するものと考えるならば、そこには、二つの肯定性の連動があると考えられることになるであろう。達成されるものの重要性が、自分の生にとっての重要性として受け止められる場合には、それを達成することを、自分の生にとって重要なこととうけとめる肯定的態度が成り立つと考えられるであろう。友愛についても同様であろう。そして、この連動性は、単にこれによって、論がうまく成り立つというだけでなく、達成、友愛の現実的あり方にかなっているように思える。なにかを成し遂げることを大切なこととしてするならば、それは自分の生にとって大切な重みのあるものとして受け取ることになるであろう。友愛についても、同様のことが言えよう。

しかし、こうした形での二つの次元の肯定的態度の融合を考えるとするならば、その場合の説が、客観的リスト説の枠内にとどまる説として説得力のあるものとなるかは、かなり疑問のように思える。人が例えば、達成されるものの大切さを自分の生にとって大切なこととして受け止めるならば、その場合にはいま述べたような連動が起こるだろう。しかし、人間にとって友愛なり何らかのことをなし遂げることなりのうちのいずれかを自分にとって大切にせねば豊かな WB の実現ができないということが言えたとしても、それだけでは、友愛と達成のいずれをも大切にしなければならないということが言えるようには、見えない。（さらに、愛に様々な形態があるとすると、そのいずれをも大切にしなればならないのかという問題も生まれるであろうし、また、Fletcher がリスト項目に入れたものの以外にも大切にし得るものがあるかもしれない。）何を大切にするかということは、個人のあり方や状況など様々な要因によるであろう。

もう一つの Tiberius 2018 の論について。私がこの論の最大の問題であると考えるのは、この論では、快楽の働きが十分に位置づけられないであろうということであるのだが、ここでは、それに比べれば、小さな問題と言える点（より正確に言えば、論の弱みになることというよりは、考察の追求不足と言ったほうが良いかもしれないことであるが）、この論において着目が不十分になっている点を、考察しておきたい。それは、人間が何かを大切にする上で、人間にとっての価値が、世界との関係性において、一定のダイナミズムをもって、その人により開拓されていくという点である。これには様々な要因が含まれると考えられる

[13]。Tiberius の論が主観説として成り立つとしても、多くの人は、何らかのことを客観的に価値があると思って行い、その中で、先行的に了解された価値枠組みにもとづいて行動しながら、それを自分の生のあり方と結び付けて自分の独特な行動、情動のパターン性との関係の下に位置づけていくこと、自己と世界とのあり方を相互的調整し、自分の valuing のあり方を模索していくこと（これは、選択肢 A と B がある場合、どのような自己変化が起きるかを予測しきれず、選択の理由のあり方に限界と独特性を生むことになるのだが[14]）、また、必ずしも一貫したプロジェクトに取り組み続けられるとは限らない世界の中で、自分のあり方を柔軟に対応させながら身を持していくのであり、その中にもそれなりの生のスタイルが生まれるかもしれないことなどが、重要になってくるであろう。――これは、いま述べたように、論の欠点というよりは、強調の必要性についての程度問題という以上のことではないと言えるかもしれない。しかし、本節でこれを取り上げるのは、そのことを考えることが、本節の狙いとして予告したこと、つまり、WB 研究と MIL 研究の連動性の必要性ということにつながるのではないか、そして、その点において、いま Tiberius の論の改訂の必要性について述べたことと、Fletcher の論の改訂の必要性について述べたこととが、かなり密接な形で重なり合うのではないかということである。

MIL がいかなるものであるかということについては、哲学において様々な立場がある。現在哲学界で主流となっている考え方は、MIL を、人がいかに大きな成果を成し遂げたかの点でとらえる傾向がかなり強い。しかし、そうした MIL 観は、必ずしも多くの人が MIL について描いているイメージに即したものではないかもしれない。多くの人は、MIL をむしろ、それぞれの人がそれぞれの人なりに人生を切り開いていくあり方とより密接な結びつきを持つものとして思い描いていないであろうか。そして（という以上に、その裏付けとなることであるが）、成果重視型の MIL 観は、心理学の MIL 研究が MIL 像として描くものともかなり齟齬がある。心理学に描かれる MIL は、それよりはだいぶ、いま私が一般人が抱いているイメージではないかと述べたものに近い(伊集院 2021a 参照)。

もしこのことが正しいとするならば、今しがた、Fletcher および Tiberius の論の改訂されるべき方向性として論じたことが、あるべき MIL の姿にかなり重なるところが大きいように思える。Fletcher の論を改訂した姿は、自分の生において何ができるかを模索していくあり方、何が自分の生にとって重要なこととなり得るのかを見出していく働きを前提として成立するものであるように思われよう。また、Tiberius の論の改訂として示した姿も、自分の生において何ができるかを模索していくあり方、何が自分の生にとって重要なこととなり得るのかを見出していく姿と重なるもの（あるいは、それを前提としたもの）となろう。さらに言えば、私が示した MIL についての方向性が仮に誤りであり、むしろ学界で支配的な、より、成果重視主義的な MIL 像が仮に正しいとしても、そうした MIL を各人が各人の場で追及するにおいては、まさにいま述べたような、自分の生においてできることを模索し、自分の生にとって重要となり得ることを自分の場において手探りで求めていくことが必要となろう。哲学的 MIL 論の進展の如何にかかわらず、たいていの MIL 観においていま述べ

たようなことが重要性を持つことは変わらないはずであり、その意味で、WB の主観説と客観説の利点を融合化していく試みを遂行し、それを好ましい姿へと改訂していく試みが、WB と MIL との関連性の考察の必要性を強く示唆するという主張には、かなりもっともらしさがあると言えそうである。

私自身は、MIL について学界で支配的な成果重視主義的発想ではなく、より、個人の場でのその人自身の生において大切にできることの模索の局面を重視する MIL 像が哲学的 MIL 像として正しいものであると考えている。それについては、すでに長めの著作（伊集院 2021a）において専門的に論究したので、ここでは、追求しない。もしその路線が正しいのなら、(そしていま述べたように、仮にそれが正しくなくともおそらくはまず間違いがなく) MIL と WB との関係を考えることなく、WB 研究における、きわめて自然な方向性、つまり、主観説と客観説の強みを融合化させる試みを、追及していくことは、生産性を欠くことになる可能性が高いであろう。

３－２　第２節の諸項目を総合的に考える

３－１で述べたことが（仮に）正しいとしても、それは、第２節で扱ったことうちの一項目についての考察の帰結にすぎず、それが、第２節で扱った他の項目といかに関連するのか、とりわけ、２－４で扱った快楽説の重要性といかにかかわるのかということが問題になると思われるであろう。

実際には、２‐４で扱った快楽の、あるいは、快楽説の重要性こそが、２－１から２－４で扱った諸項目をもとにした統一的方向性をさぐることの核になり得るのではないかということを提起したい。

まず、快楽説の成否にかかわらず、もっと言えば、快楽説が間違っているとしても（実際に私は快楽説は妥当でないと考えているのだが)、WB にとって快楽がきわめて重要である、いやそれ以上にある種の特権的位置を占めているのではないかということを提起したい。

そのためにまず、Tiberius の論が快楽の役割を十分に組み込めていないと先に簡単に述べた点について記しておく。Valuing はそれなりに高度な能力による活動である。しかし、それを備えていない子供や動物が快楽を感じている際にそれに WB を否定することはむずかしい[15] し、さらに（私にはより重要なことと思えるのだが）成人の人間がいつも valuing の能力を発揮しているわけではなくとも、発揮していない時間帯においても、快楽があればそれは WB 的にプラスのはずであり（それが後から valuing の対象になるにせよ、そのように後追いで対象にならなければプラスにならないと考えるのは合理的ではないであろう)、別の言い方で言えば、快は valuing とは関係なく善であると考えざるを得ないように思われるということである。

これは単に Tiberius の論の問題というにとどまらない。快楽に一定の重要な役割を与えない説は、WB の説として不十分になると思われるからである。ある説が経験機械の生の WB

値をゼロと産出するのならば、その説が WB の説として成り立っているとは考えにくい。(水槽の中の脳が二つある場合、片方が快楽の生で片方が苦痛の生であるのならば、当然 WB 的に差があると考えざるを得ないであろう[16]。) さらに付け加えると、２－４で経験機械の議論が快楽説に対する決め手となることに対して疑義が出されていることを取り上げたが、もし経験機械とそれに類した事例についての（多くの）人間の直観に（それなりの）正当性があるとするならば、そうした、経験機械的諸事例についての近年の実験哲学的な諸研究の成果（de Brigard 2010, Weijers 2014 など）は、(快楽説のための弁護になっているかどうかはともかくとして）快の価値をそれなりに大きく見積もらねばならないことを示しているように思われる。(先に述べたように、経験機械的実験で設定をいろいろと変更すると、それなりに多くの人が経験機械の中の方の生を選択する。)

さらに、このことは、実は欲求充足説の問題にも連なると思われる。欲求充足と快との関係についての私自身の直観を言うならば、欲求された事柄が（客観的に）成立しても（I desire that p でかつ p）それが何らかの充足感、快感などを齎さないとした場合に、本人にとって WB 的にどうプラスになるのかがまったくわからない。欲求された事柄が実際に実現されているかということと、本人がそれに満足感をもつかということは事柄としては別のことであり、典型的な欲求充足説が問題にしているのはあくまでも前者であるということに注意しなければならない。ただし、これが、この分野において学者の直観が分かれる一つの（代表的）局面と言ってよいかもしれないということには注意が必要である。必ずしもすべての学者が私の直観を分かち持っているわけではない。それでも、まず、先にも述べたように、WB にあずかり得るのが、快感およびそれに類した肯定的感覚をもつものに限定されるはずだという直観を重視するならば、その直観と、快感が生じない欲求充足に WB を認めることとの間の整合性がつくのかが大きな問題となる。また第二に、充足感、満足感等がなければ何の善もないとまで言えるかはともかくとしても、それがなければきわめて大きな善が損なわれることは、動かしがたいように見える。(念のために記しておくと、欲求充足説に関しての以上の問題が、欲求充足説の決定的な欠点になると言わんとしているわけではない。欲求充足説は、例えば Heathwood 2016 のように欲求充足説と快楽説との接合をはかるなど、様々な形で生き残るかもしれない。)

快楽が重要であるかということと、快楽説が重んじられるべきかということとは、もちろん別のことである。しかし、快楽説の生き残りのためのおそらくは最も有力な道は、２－４の終わりの方で扱った、WB 複数説であろうかと思われるのだが、それを考えることによって、快楽の重要性がより浮かび上がるように思える。

これを考えるためには、先に Tiberius の説を改訂する必要性を考えたが、その改訂された姿と今の WB 複数説を合わせて考えてみるのがきわめて分かりやすい。Tiberius の論の改訂として本稿は二つのことを提起した。第一に、value fulfillment（VF）だけでは快楽の重要性が抜け落ちる、つまり、valuing が起こらない場合にも快は快として価値があると考えるべきであること。このことからすれば、WB を VF＋快の合算式で考える路線が浮かび上

がる。もう一つはVFをよりMILの姿に近づけること、あるいは、valuingをmeaning化する（MV化する）こと。ここから浮かび上がるものを第一のことと合わせるならば、WBは快＋MVFとでも表せるものとなろう。これと、WBの複数説を組み合わせるならば、WBには、快と、快＋MVFの二つがある、あるいは、快とMVFとの二つがあるという路線が考えられることになると思われるかもしれない。ところが、これではまだ快楽の重要性が十分に組み込めていないことになる。というのは、もし、valuingや欲求の対象となる事態が現実化されたとしてもそれが本人の満足感などの肯定的な心的状態に結びつかなければ、WB的には無価値であるという、先に述べたことが正しいとするならば、MVFはそれ自体では、WBの名に値しないように思えるからである。とすると、WBとしては（正確に言えばWBのうちの一つの構成要素としては）MVFはMVF的快と書き改められねばならないことになろう。――「的」という言い方はあいまいな表記であるが、とりあえずMVFに伴って生まれる快、そして、MILとの関係性によりWB価値が変動するものと、定式化しておきたい。おそらくこれはさらに細密化、厳密化の必要があるであろう。またこの考え方は、Feldman 2004の、快楽の価値が、様々な客観的要因（がいかに満たされているか）によって、変わってくるという考え方、つまり、快×客観的諸要因＝WBという把握図式にも対応する[17]――つまり、WBを二つに分け、一方を快楽（あるいはそれに類した心的状態）にあてがうにしても、残りの一方においても、快楽が重要な役割を演じることを否定することが難しくなるのではないかということになる。

これは、WBとMILとの関係を考えるうえでも重要である。実は（とは言ってもMIL哲学に携わっている人には、周知のことだが）MILがどのような価値なのかについては、MILがWBの部分であるという考え方と、MILがWBとは独立の価値であるという考え方がある。現在の哲学的MIL研究においては、実際のところは、この両者のいずれが正しいかについては（まだ）論争がそれほど起こっておらず、実質上それをペンディングしたままにMILが探られていっているのが現状である。上の考察は、ある意味では、MILをWBにかなり近いものとして描いたが、ある意味では、WBとMILを峻別する方向に道を開いたものであると言えるかもしれない。

もし、WBが快楽と、MILで構成されていると考えるならば、MIL自体は、快的なもの、快およびその他の肯定的心理状態というわけではない以上、MIL自体をWBととらえるのは不自然であることになる。とすれば、快の部分を、裸の快＋MVF的快とおくことになり、WBが快＋MVF的快＋MILによって成り立つと考える路線、あるいは、快＋MVF的快によって成り立つと考える路線が、考えられることになりそうである。

とすると、この段階で、これとWBの複数性の観点とを結びつけて考えるならば、次のような路線が自然と浮かび上がってくると考えられる。そして、MILとWBとの関連性を考えることと、快楽説の生き残りの有力路線としてのWB複数説を考え合わせることから（逆に）MILとWBのある種の区別も考えざるを得なくなるのではないかという提起も考えられるようになると思われる。今しがた、浮かび上がってくる路線と述べたのは、WBは狭くは快（裸

の快）であり、より広くは快＋MVF 的快であり、最広義には快＋MVF 的快＋MIL とする考え方である。しかしながら、ここで、このうちの、三項路線は、あまり自然なものではないように思われる。というのも、二項目に対してさらに MIL 自体が WB 値的に加算されると考えるのは自然ではないし、そもそも、満足感を直接的に構成しない可能性があるものをそれ自体 WB の構成要因とすること自体に説得力があるのかということが（これまでの議論が正しいと仮にするならば）問題になろうからである。こうして考えていくと、MIL は WB の構成要因というより、むしろ、MIL は WB（のうちの重要な部分）を生み出す働きをするのであり、MIL と WB は我々の生の能動性にかかわる側面と状態的あり方にかかわる側面という二面の価値に対応すると考えるほうが、合理的に思える。そして、これは、我々の WB、MIL の語感（的直観）に対応しているものと考えられるであろう。そして、このように考えるならば、WB と MIL との関係は並列的な包摂関係のようなものでとらえられるものではなく、むしろより、立体的で力動的な関係性のうちにとらえられるべきであることになろう。

さらに、この観点に立って考えるならば、２‐４の項目と２－３の項目との間には重要な連関があることになる。WB において快が重要であるとすれば、快がいかに起こるかということが少なくともかなりの程度経験科学的な問題である以上、実証研究へのその点での目配せはどうしても重要になる。そして、心理学において MIL 研究と WB 研究との間の連携は必ずしもきわめて強いようには見受けられないが、それでも WB 研究において eudaimonia 系のものは言うに及ばず、hedonic 系の研究においても、MIL に関連を持つような要因が WB に大きな相関性、影響関係を持っていることが解明されつつある [18]。このことを考えるならば、先にも述べたように、哲学は、WB 心理学を活用するだけでなく、MIL 心理学をもより積極的に活用するべきであろう。また、心理学の内部においても両者の間のより強い架橋が期待されるが、場合によれば、哲学はその架橋のための手引きを与える力を発揮できるのかもしれない。

２‐２の融合化（主観説と客観説の両者の利点の融合）の視点を軸として、それと、２－４（快楽説の復権さらには WB の多義性ないしは複数性の可能性の考察）、２－３（実証研究との連携）が、有機的に総合化される見通しが（もちろん提案段階にすぎないとは言え）描けたことになる。そして、これにより、２－１に整理されたビッグスリーのそれぞれの利点を総合化する路線が浮かび上がってきたことになる。

以上のことについて、仮にこの路線が正しいとした場合に、今後の課題としてどのようなことが考えられるのかをめぐって、いくつかの注記的なことを加えておきたい。

まず、快楽説、欲求充足説の存在を考えれば、そして、それらの利点が組み込まれることに合理性があるとするならば、そもそも、快楽、欲求のそれぞれがいかなるものなのかについての専門的な考察への参照は重要となるであろう。ただ、先にも述べたように、快楽、欲求についての哲学的考察は、残念ながら、哲学の中で、必ずしも進んだ領域とは言えない。心の哲学を専門とする学者の今後の研究の発展が期待されるとともに、WB を専門とする、倫理学価値論畑の哲学者も、従来以上に、これに積極的にかかわっていく必要があるのかも

しれない。特に、快楽と欲求との間の微妙な関係は重要な問題となるであろう。さらに、当然のことながら、その分野についての実証研究への目配せも必要になろう。快楽、欲求の哲学研究では、神経科学における「wanting」と「liking」を区別するBerridgeらの論（e.g. Berridge 1996）への着目は、比較的早い段階から起こっている（e.g. Katz 2005a, Schroeder 2004, cf. Sizer 2013）が、今後の展開への注視、とりわけ、「wanting」と「liking」の区別の一方に存在する関連性への注目も重要になるであろう。

第二が主観説内の区別として先に上げた、客観的主観説と主観的主観説について、両者の区別に着目するとともに、両者の利点をいかに生かし融合させられるかが考えられるべきなのではないかということである。主観説のうちの主流は、（先にも述べたように）客観的主観説の方と言えよう。客観的主観説は、本人の肯定的態度の是認により、生じた状態の善悪が決まるものとする主観説であるものの、世界との一定の客観的関係性を重視する。この世界との関係性への視点は、MILにおいて世界との関係性がとりわけ重要であることを考えると、WBとMILの関係を考えるうえでも極めて有益な拠り所を提出してくれることが期待される。同時に、客観的主観説が快楽説に対して抱える先に述べたような、弱みをいかに克服していくかを考えるうえでも、主観的主観説の強みをいかに取り入れていくかということが重要になるであろう。もちろんそのためには、欲求（などの肯定的態度）と快楽との関係という、第一の課題として挙げた問題への取り組みも重要になる。

第三は、上の二つを総合したような課題とも言える。上にWBの姿の一つの提案として「WB＝快＋MVF的快」を提起した。もちろん、これは一つの提案でしかない。しかし、この提案はある意味では、その不十分さの点で、興味深いものと言えるかもしれない。

ここで不十分ということで私が念頭に置いているのは、これが仮にWB値の産出のための正しい式だったとしても、WBの規定としては、座りの悪いものであろうということである。この式は、かなり雑然としたものに映るのではなかろうか。問題は加算される二つの項の間にはっきりとした共通項があることであり、その存在が、この式を煩雑なものとしている。煩雑さは、客観的リスト説の典型的なリスト項目と対照してみると明瞭であろう。客観的リスト説の論者たちが提示する平均的なリストの中の諸項目（快、達成、愛、知など）の項目間には特に共通性はない。そのことは客観的リスト説の弱みのように思われてきたが、今日では、それほど大きな弱みとは受け止められていないように見受けられる。項目の一つ一つがどのような原理に基づいてリストに加えられるのかと問われても答えられないのだとしても、それは、快楽説、欲求充足説にしても同じではないかと言い返すことができそうだからである。つまりは、弱みと言われるならば、それは他説に比べて程度問題、あるいは、複数か単数かの違いにすぎないと居直ってしまうことが可能のように思われるわけである。だが、そのような言い立てをいま問題になっている定式化に適用することは、かなりの抵抗感を伴うであろう。○○も××もどちらもそれ自体として善なのであり、○○一つを立てる説が○○がなぜ善なのかそれ以上答えようがないのと事情は同じなのだ（違いは、複数か単数かという点だけだ）、と述べ立てることがそれほど不自然でないとしても、○○も○○に

××を掛け合わせたものも、どちらも、それ自体として善なのであり、それ以上に説明しようがないのだという回答は、いかにも見苦しく映る。どのような機構がそこに（快と MVS 的快との間の関係を成立させるものとして）働いているのかを探ることに動機づけられるのは当然のことと言えよう。これは、快と、valuing 等が、そして、おそらくは valuing においても重要な役割を果たしている欲求等が、如何に関連し、生においてどのような機構を形作っているかを探ることへと連動することになるであろう。――もちろん、私は、あの定式化の路線が正しいものであることを論じるための材料が整っている状態では現在のところなく、その正当性をこの段階で言い立てるつもりはない。しかし、定式化は、いまのような形で見る限りは、むしろ、答えというよりも、より好ましい答えに達するための、経過点として有益と言えるのかもしれない。修正を加えること（場合によっては大きな変更を加えること）と、機構の根底を探ることが並行して行われるとするならば、そしてさらには、この機構の解明が、快がなぜ善であるのかについての何らかの解明もしくは理解にもつながるかもしれないとするならば、この提案（式）に、WB の解明に至る途中駅としての好ましい役割を期待することは、それほど不自然なことではないかもしれない。

注

（1）Fletcher 2016 と同年に出版された同著者による編である、ハンドブック（Fletcher G. ed. *The Routledge Handbook of Philosophy of Well-Being* Routledge）も大変定評があり、WB 哲学研究のすそ野を広げるうえで大きな貢献をした。

（2）Fletcher 2016 等の成果を活用したたいへん便利な書物である。

（3）快楽説の代わりに、より広く、mental statism をあてるべきという見方もできるかもしれない。しかし、快の代わりに肯定的経験すべてをあてる説を今日では、broad hedonism と呼ぶことがある(cf. Gregory 2016 (115))。（ただし、これに関しては、Deijl 2019 の論点の検討などが必要になる。）

（4）今日の哲学の標準的見解では、valuing とは、単なる価値判断ではなく、情動、判断、欲求等の総合、あるいはそれによる本人の情動、行動の発動に対する構えの形成により成り立つものである。

（5）Katz 2005b は、哲学における快楽研究が主に倫理学畑の研究者によって担われてきたが、本来は心の哲学に属するものであり、その水準で評価されるべきものであることを、指摘している。

（6）このように扱わないと、ほとんどの客観的リスト論者たちが快楽をリスト項目に入れている一方で、快楽説が主観説であるか客観説であるのかについての先に述べたような事情がある以上、ひどく混乱することになる。

（7）こうした点については、Tiberius 2014, Tiberius, Hall 2010, Tiberius, Plakias 2010 をも参照されたい。また、そもそも、人が value するものは（単に欲求するものと比

べて）より、客観説が価値あるものとするものに（現実上）近づくものであるという点でも、こうした連携は言えるであろう。

（８）ここに示すのは、Alexandrova 2017 がまとめているものを簡略化したものである。

（９）Haybron, Tiberius をはじめとした何人かの哲学者は、心理学者と共著論文を出し、また共同のワークショップなどももよおされている。また、哲学的 happiness 研究として定評のある書物である Haybron 2008 の裏表紙には、Ed. Diener, B. Schwarz といった有名な心理学者たちが哲学者にまじって推薦文を寄せている。

（10）これについては、伊集院 2021a 参照。

（11）このことについては、伊集院 2016, 2021b, 2022 で扱った。（なおこれらは、2015 年 9 月に完成され、その段階でまとめて投稿されたもの（投稿規約による）である。）

（12）Fletcher 2016 の pp. 65-75 の議論を考えると、より詳細な論述が必要であると判断されるが、それは他の機会に期したい。

（13）これについては伊集院 2021 参照。また、関連する問題として伊集院 2018。

（14）この問題に関連する重要な指摘に、Paul 2014,2015 の transformative experience の問題提起があるが、しかし、Paul は what-it-is-like-ness のとらえられ方の変化のみに過度に注目し、人間が何ができるについて transformation が起こるという問題を十分に主題化しきれていないように思える（これについては伊集院 2021 第５章第２節参照）。

（15）この問題については cf. Lin 2017a。

（16）cf. Fletcher 2016, また Lin 2014, 2017a も参照。

（17）ただし単純な掛け算方式にしてしまうと、経験機械の中の WB がゼロとなってしまうが、これでは WB の説として成り立たなくなろう。また、Feldman 的なこの路線は、本来の意味での快楽説とは呼べないものとなるという理解が、今日では大勢であると理解する。

（18）これについては、伊集院 2021a の第６章第１節を参照。

文献

・Alexandrova A. 2017. *A Philosophy for the Science of Well-Being*. Oxford.

・Berridge K. 1996. Food Reward : Brain Substrates of Wanting and Liking. *Neuroscience and Behavioral Review, 20*, 1-25.

・Besser-Jones. L. 2014. *Eudaimonic Ethics The Philosophy and Psychology of Living Well.* Routledge

・Besser-Jones. L. 2021 *The Philosophy of Happiness An Interdisciplinary Introductin.* Routledge.

・Bishop M. 2015. *The Good Life. Unifying the Philosophy and Psychology of Well-Being*. Oxford.

・Crisp R. 2006. *Reasons and the Good*. Clarendon.

・Crisp 2013. Well-Being. *Stanford Encyclopedia of Philosophy.* rev. 2013.

・De Brigard. 2010. If You Like It, Does It Matter If It’s Real ?. *Philosophical Psychology, 23*, 43-57.
・Deijl W. 2019. Is Pleasure All That Is Good about Experience ?. *Philosphical Studies, 176,* 1769-1789.
・Deijl W. 2021. The Sentience Argument for Experimentalism about Welfare. *Philosophical Studies, 178*, 187-208.
・Dorsey D. 2012. Subjectivism without Desire. The *Philosophical Review, 21*, 407-442.
・Feldman F. 2004. *Pleasure and the Good Life.* Clarendon Press.
・Fletcher G. 2013. A Fresh Start for the Object-List Theory of Well-Being. *Utilitas, 25,* 206-220.
・Fletcher G. 2016. *The Philosophy of Well-Being An Introduction.* Routledge
・Fletcher G. 2021. *Dear Prudence: The Nature and Normativity of Prudential Discourse*. Oxford
・Gregory A. 2016. Hedonism. In Feltcher G. ed. *The Routledge Handbook of Philosophy of Well-being*. Routledge. 113-123.
・Haybron D. 2008. *The Pursuit of Unhappiness.* Oxford.
・Heathwood C. 2014. Subjective Theories of Well-Being. In Ben Eggleston & Dale Miller (eds.), *The Cambridge Companion to Utilitarianism.* Cambridge University Press. pp. 199-219.
・Heathwood C. 2016. Desire Satisfaction and Hedonism. *Philosophical Studies, 128*, 539-563.
・伊集院 利明. 2016. 善のリストを検討する（その１）. 『文学論叢』, 153, 131-149..
・伊集院利明 2018 『愛の哲学的構成』. 晃洋書房.
・伊集院利明. 2021a『生の有意味性の哲学――第三の価値を追求する』. 晃洋書房
・伊集院 利明. 2021b. 善のリストを検討する（その６）. 『文学論叢』, 158, 31-46.
・伊集院 利明. 2022. (近刊). 善のリストを検討する（その７)『文学論叢』, 15９.
・Kagan S. 1994. Me and My Life. *Proceedings of the Aristotelian Society, 94,* 309-32.
・Kashdan T., Biswa-Diener R., King L. 2008. Reconsidering Happiness : The Costs of Distinguishing between Hedonics and Eudaimonia. *The Jourlnal of Positive Psychology, 3*, 219-233.
・Katz L. 2005a. Pleasure. *Stanford Encyclopedia of Philosophy.*
・Katz L. 2005b. Review of Feldman, Pleasure and the Good Life. *Notre Dame Philosophical Reviews.*
・Lee A. 2019. Is Consciousness Intrinsically Valuable ?. *Philosophical Studies,*

175, 1-17.
・Lemaire S. 2016. A Stringent But Critical Actualist Subjectivism about Well-Being. *The Ethics Forum, 11*, 133-150
・Lin E. 2014. Pluralism about Well-Being. *Philosophical Perspectives, 28*, 127-154.
・Lin E. 2016. How To Use Experience Machine. *Utilitas, 28*, 314-332.
・Lin E. 2017a. Against Welfare Subjectivism. *Nous, 51*, 354-377.
・Lin E. 2017b. Enumeration and Explanation in the Theories of Welfare. *Analysis, 77*, 65-73.
・森村進 2018. 『幸福とは何か　―思考実験で学ぶ倫理学入門』　ちくまプリマー新書
・Parfit D. 1984. パーフィット D. 『理由と人格』. 勁草. (森村訳). (訳は 1998) . (原著 *Reason and Persons.* Oxford.)
・Paul 2014. ポール. 奥田訳. 『今夜ヴァンパイアになる前に』. 名古屋大学出版会. (訳は 2017) (原著 *Transformative Experience*. Oxford.)
・Paul L. 2015. Transformative Choice : Discussions and Replies. *Res Philosophica, 92*, 473-545.
・Railton P. 1986. Facts and Values. in *Facts, Values and Norms.* Cambridge U.P. 2003. 43-68. (初出 *Philosophy and Public Affairs 13*, 134-171.)
・Scanlon T. 1998. *What We Owe to Each Other.* Harvard.
・Schroeder T. 2004. *Three Faces of Desire.* Oxford.
・Sizer L. 2013. The Two Faces of Pleasure. *Philosophical Topics, 41,* 215-236.
・Sumner L. 1996. *Welfare, Happiness and Ethics.* Oxford.
・Tiberius V. 2018. *Well-Being as Value Fulfillment.* Oxford.
・Tiberius V., Plakias A. 2010. Well-Being. In Doris J.ed. *The Moral Psychology Handbook.* Oxford University Press. 402--432.
・Tiberius V. 2014. How Theories of Well-Being Can Help Us Help. *Journal of Practical Ethics,* 2,1-19.
・Tiberius V., Hall A. 2010. Normative Theory and Psychological Research: Hedonism, Eudaimonism and Why It Matters. *Journal of Positive Psychology,*5, 212-225..
・Weijers D. 2014. Nozick’s Experience Machine Is Dead, Long Live the Experience Machine !. *Philosophical Psychology, 27*, 513-535.
・Woodard C. 2013. Classifying the Theories of Welfare. *Philosophical Studies, 165*, 787-803.
・Yelle B. 2014. Alienation, Deprivation, and the Well-being of Persons. *Utilitas, 26,* 367-384.